
コンプレックスリ

星河七海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンプレックスリ

【Nコード】

N8721H

【作者名】

星河七海

【あらすじ】

一枚のポスターが視界に飛び込んできた。 これ一錠で、貴方の方のコンプレックスが治る 何の才能もない、何をやっても駄目です、ずっと馬鹿にされ続けてきた哲は、いかにも怪しげな薬を飲んでみた。すると……。

『コンプレックスリ』

「哲は、何をやってもダメだな」

「どうして、こんな簡単なこともできないんだ」

薬瓶に入った錠剤を見ながら、耳朶に眠る過去の言葉が、ふいに蘇った。

僕は、三兄弟の末っ子として生まれた。両親は弁護士、長兄は大学病院の医者、次兄は東大生で将来を目されている。そんな完璧で優秀な家族、末っ子の僕だけが、何をやってもダメだった。こんなに何の才能もない人間がいるのか、と呆れ通り越して、感心してしまふほどだ。周囲にいる皆からも、いつも笑いや者にされて、自分は何のために生まれてきたんだろう、と途方に暮れる毎日。それは、社会に入ってからと同じことの繰り返しだった。何十回目で、ようやく就職が決まったと思ったら、その会社が倒産。次に入った会社では、同期のエリートに濡れ衣を着せられて、クビにされた。家に帰りづらくて、ふらふらと街を彷徨っていると、一枚のポスターが視界に飛び込んできた。

これ一錠で、貴方のコンプレックスが治る

そのキャッチフレーズは、僕にとって甘い誘惑のように感じた。別に効果なんて、なくても良かったんだ。せいぜい気休め程度で、効果など期待していなかった。

僕はそのポスターが貼ってある、営業しているんだかしてないのか分からないような店に入った。店内は、いかにも怪しい雰囲気を出して、店の奥からお婆さんが出てきた。薄気味の悪い三白眼、真っ白な白髪、染みとシワだらけの肌。僕は、口元を引きつらせながら、「妖怪みたい」と思っていた。

「あの、外にあるポスター」

「……薬をお望みかい？」

「はい」

しゃがれた声が、静かな店内に不気味に響く。お婆さんは、引出しから何かを出して、僕に差し出した。それは、錠剤の入った薬瓶だった。僕が財布からお金を出そうとすると、お婆さんは首を横に振って、気味の悪い笑みを残し、店の奥に入っていつてしまった。

こうして、今に至る。

白昼の公園だけあって、幼い子供達が母親と一緒に遊んでいる。

きやあきやあと、無垢な騒ぎ声が公園中に飛び交っていた。色んな可能性を持つ子供達の声、何だかそれが、急に恨めしく思えた。その公園の木陰にあるベンチに、スーツを着た社会人。傍目から見れば、リストラされたサラリーマンに見えることだろうか。手元に薬なんて持っているから、既に危ない人だと思われるかもしれない。だけど、そんなことどうでもよかった。半ば投げやりに、持っていた薬瓶から錠剤を一錠だけ出した。その一粒をじーっと見つめてみる。特に、普通の薬と変わりはないようだ。喉の鳴る音が、異様に大きく聞こえる。目をぎゅっと瞑って、一気にそれを飲み込んでみた。自販機で買ったお茶で、その錠剤を流し込み、一息つく

。十秒、二十秒、三十秒。一分経つても、身体に異変は感じられず、思わず笑いたくなってしまった。そりゃあそうだ。こんな薬一粒で、コンプレックスが治るんだったら、苦労はしない。こんな物に騙されるなんて、本当に僕は駄目だなあ。自嘲気味に笑って、深い溜め息を落とした。

そして、その翌日。

「哲？昨日さ、僕の問題集に触った？」

「え……。ああ、ごめん。どんなのやってるのか、見てみただけだよ」

帰ってきた時、机の上にあった次兄の問題集。一問だけやってみたけど、やっぱり分からなくて、結局やめたんだっけ。

「この問題、最後までやってみて」

「は？」

「いいから」

僕は、よく分からずに一応、最後まで問題を解いてみる。すると、次兄はそれを見るなり、それよりも難しそうな問題を出してきた。とりあえず、言われるがままに問題をこなしていると、次兄はいきなり怒り始めた。

「哲、何で今まで出来ない振りなんてしてたんだよ！俺すらも出来ない問題が、何でお前に解けるんだよ！？俺のところ、馬鹿にしてたのか？」

「そんな、わけ……」

「じゃあ、何で問題が出来るんだよ！」

次兄の怒号を聞いて、昨日の錠剤が脳裏をよぎった。まさか、本当にあの薬が効いた？僕は、慌てて父の書斎に入って、端から本を読んだ。今までは、難しい本を読んでも、理解できなかった。でも、どうしてだろう。全部の本の意味が分かる。あの薬は、本当に効果があったんだ。何にも出来ない自分が嫌だった。馬鹿にされ続けるのは、正直きつかった。でも、これで僕は完璧な人間になれる。そう思うと、これからの人生が楽しく思えてきた。頭脳を生かして、僕はすぐに就職できた。大手企業メーカーの企画課で、様々なヒット商品の生み親として、雑誌にも取り上げられて、一躍、時の人となった。少しの失敗がある度に、その失敗をカバーするため、薬を一錠ずつ飲んだ。定期的に、あの店にも通って、薬瓶を購入した。それから昇進して係長になった僕に、両親は「哲は、自慢の息子だ」と言ってくれた。今までずっと罵られていた分、余計に嬉しかった。両親に認めてもらえた。それが、何にも変えがたいご褒美だったんだ。そう、全てが順調だった。

そんなある日のこと、他の大手企業と接待があった。重要な接待で、会社の今後を左右するものだった。出張したその足で、その接待に向かうと上司に言っておいた。だが、出張先でトラブルが起きてしまった。僕は携帯電話から会社に掛けて、その旨を伝えると、電話

口の事務社員は、

「はい、分かりました。確かに伝えておきます」

すっかりとした声で、そう言ってくれた。僕は、少し安心してトラブルを片付けてから、接待に向かったのだ。しかし、そこに待っていたのは地獄だった。

「片岡君、どういふことかね。連絡もせず！」

「え、いや。連絡はちゃんとしました。トラブルが起こったから、接待に遅れると」

「事務員は聞いてないと言っているが？」

「そんな……でも、確かに電話を」

「もう、向こうの社長さんは、おかんむりだ。うちの契約も白紙に戻すと言われた。この損害をどうしてくれるんだ！片岡君、君はもうクビだ。出ていきたまえ！」

訳が分からないまま、僕は会社をクビになってしまった。会社に私物を取りに来た時、何故こんな事態に陥ったのか、原因が分かった。私物を持って廊下を歩いていると、資料室から声が聞こえてきたのだ。

「いい気味だよな、片岡の奴」

「だな。俺達を散々、こき使いやがって」

「少し偉くなつたからって、調子に乗りすぎだったもんな」

「これで、ようやくいなくなるから清々するよなあ」

「確かに」

遠くに聞こえる下卑た笑い声、僕は放心しながら、その場から去った。僕の周りには、いつのまにか敵だらけだったんだ。信用できる奴なんて、最初から誰もいなかったんだ。

そしてまた、公園のベンチで薬瓶を眺めていた。何故、あの時気付かなかつたんだろう。薬瓶のラベルに書いてある、重要な注意事項に……。

注意事項：服用し過ぎると、副作用が起こる恐れがあります。

ご注意ください

その副作用の一例として、人望が無くなる、とそう書かれていた。

END

(後書き)

タイトルは、本当に思い付き(笑)
この話を見ていると、『世にも奇妙な』を思い出します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8721h/>

コンプレックスリ

2011年1月4日14時56分発行